佳作

感謝の気持ちを胸に

秋田県藤里町立藤里中学校
三年　藤本夢羽

「バスケ部を作ってください。」一年生の秋。私たち五人は校長先生に告げた。無理だってことは分かっていた。でも中学校に入ってから、バスケがしたい思いが強くなっていた。私たちの思いを校長先生は受け止めてくれた。そして十一月、同好会としてスタート。先生がバスケ部を作るにあたって話してくれたことを今でも忘れない。「大変だったんだ。大変ということは、大きく変わること。君たちは恵まれているんだ。周りの人に何か言われるかもしれない。でも自分たちの選んだ道なら、責任をもってやりきれ。」この言葉を胸にバスケ部がスタートした。冬の間は体力づくりを中心に練習を重ねた。四月からは、新しい監督、コーチ、六人の新入部員と共に日々練習をした。

新しく始まる練習は、辛いメニューが多く休みのない日が続くようになった。そのたびに私は、「やだな」「やめたいな」と思うようになっていった。でも、校長先生からもらった言葉を思い出すと、このままではいけない、もっと頑張らなくてはと思えた。自分だけではない。三年生全員が思っていたことだろう。

休日になると練習試合や大会が毎週のようにあってみんな気合が入る。でも私たちには、直さなければならない課題があった。「声を出さない」ということだ。プレーが成功するためにはコミュニケーションをとらなくてはならない。しかし、私たちはほとんど声を出さず練習をしていたのだ。声を出さなければいけないことは分かっていた。副キャプテンとしてもチームに声をかけなければならない。当時の私にはそれをすることができなかった。総体前、先生たちも私たちも「優勝」を目指し練習もハードになる。新人戦二日前の木曜日、練習後、私とキャプテンは先生に呼ばれた。何を言われるかは、予想がついた。予想通り、声についてだった。「二人がチームの先になって声を出さなければ大会でも勝てない。チームを盛り上げることができないのなら二人の立場なんかいらない。」そう告げられ、一気に涙があふれた。どうしていままで声を出さなかったのか、どうして先生に言われる前にできなかったのか。自分の情けなさを実感し、その日は家でもずっと泣いていた。次の日の練習は、人一倍声を出した。後輩たちも変化に気付いたのか声を出してくれるようになった。先生たちからは、「やればできるじゃないか。」と認められた気がした。大会当日、どのチームにも負けない声で一試合、一試合戦い、みごと優勝を果たすことができた。改めて先生の言葉は私たちの気持ちを変えてくれる魔法の言葉だと思った。

それからの毎日は、チーム全員が声を出して、コミュニケーションがとれるようになった。成功してもミスをしても声を掛け、いつでもチームが盛り上がっている部活動となった。

他の監督さんからも、「元気があっていいね。」と言われてうれしかった。一度辛い思いをしたがその辛さをばねに頑張ってきて本当によかったと思う。このときだけではない。プレーがうまくいかないときは、怒られて「やめたい」と思うことも少なくはなかった。でも今ここでやめてしまったら、逃げてばかりの自分になってしまう。そんなことは絶対したくないと必死で練習をする。プレーが成功してほめられるとやってて良かったとうれしく思う自分がいる。やはりバスケが好きなんだと感じることができた。しかし、バスケ生活にもいつか終わりはくる。

三年生の夏、最後の大会だ。全県枠一つをつかむため、チーム一丸となって戦った。結果は準優勝。全県大会へは進むことができず私たちの夏は終わりを告げた。自然と涙が出てきた。悔し涙もあったが、やりきったという達成感のある涙でもあった。

今まで学校生活を送ってきた中でこれほど人に感謝をしたことはなかった。同好会がスタートしてから、三年生の夏までたくさんの先生方、チームの保護者の方々、チームメート、地域の方に支えられてここまでくることができた。そして何より、バスケットボール部を作ってくださった校長先生には本当に感謝してもしきれないほど感謝をしている。あのとき校長先生が教えてくれた言葉は絶対に忘れない。監督、コーチの言葉もだ。まだまだこの文章にはのせきれないほどの言葉をもらった。この言葉たちは、これから私が生きていくうえの大切な財産となるだろう。どんな壁にぶつかったとしてもバスケットを通して教えてもらったことを思い出し、乗り越えていきたいと思う。私は、すばらしい仲間と先生に出会えバスケができたことに、誇りをもって生きていこうと思う。本当にありがとう。